

# 『子どもに生きた人・倉橋惣三』

—その生涯・思想・保育・教育—

森上史朗著（フレールベル館）

田代 和美

「近ごろの子どもの状況を考えるにつけ、倉橋惣三の残した仕事に再び光をあて、子ども理解の真髓に接し、そこから未来へと繋がる保育思想をつむぎ出したいと念ずること頻りである。」それゆえに「倉橋がその生涯をかけて残した仕事を評価し、多くの読者に紹介し、膨大な著作の一冊一冊を手渡しするとうる案内役をとめる」ために著者はこの書を著した。

とにかくまず驚くのは、その収集した資料

の膨大さである。倉橋惣三著作及び倉橋惣三に関する研究文献等という資料だけで一〇〇頁を優に超えているのである。いかに著者が、熱意を持ってこの仕事に力を注いだか、敬意をばらわすにはいられない。歴史的な資料を調べることは楽しい仕事ではあるが、自分の関心あること、まさに必要な内容を探し当てるまでのその労力たるや大変なもので、これだけのものを探し出して読み、まとめるまでに、一体どれだけの膨大な資料に目を通

したのでらう。それに想像しただけで気が遠くなりそうである。およそ十年に渡って調べた上でのこの書であるというから、私なんぞの想像をはるかに超えている。また本書においては、倉橋惣三の著作のみでなく、彼の子どもや教え子たちへのインタビューも含め、多くの生きた新たな資料も加えられている。それを一冊の本で読ませてもらえる私は、なんて幸せなのだろうと思わずにいられない。こんな楽をしてよいものかと、少々後ろめたさを感じながら読んでしまう。

この書は倉橋惣三の著作そのものは、旧かなづかいで抵抗があるという人にも倉橋の著作がよめる絶好の書である。それもすべての著作がこの一冊の中に含まれているのである。

倉橋惣三の生涯（第一章）における幼少時代と家庭環境を読んでいると、彼が幼い頃に

両親にしてもらったことや親を見て育ったことが、根本の部分でいかに彼の思想に影響を与え続けているかが感じとれる。大人と子ども、親と子どもについての彼の考え方の基本には、彼の親と彼自身の関係が常にあるように私には読み取れた。子ども時代に子どもとして楽しい時を過ごしてきた彼ゆえに、いつまでもその楽しさをもち続けて生き、そして子どもが自分の事のように分かったのではないかとさえ思われる。また旧制第一高等学校時代の内村鑑三との出会いやキリスト教徒になろうと努力しながらも、信徒になりにくき悩んでいる姿やわが子の誕生とともに変わってくる児童観など、ひとりの人間としての様々な側面が見えてくるようで興味深い。

倉橋の保育論に関しては、著者の『児童中心主義の保育』にもかなり詳しく述べてある

が、倉橋惣三の宗教教育・道徳教育（第三章）や倉橋惣三と児童文化（第四章）、倉橋惣三の児童保護論（第五章）などは、私にとっては目新しく、非常に興味をそそられた。保育論以外のこれらの分野での彼の論、特に児童保護論は、保育論よりも徹底して妥協がないように感じられた。幼児教育の立場から児童保護について論じるという門外漢ゆえの強さであろうか。これらの保育論以外の分野での彼の論と併せて彼の保育論をもう一度読み直すと、保育界の中では彼が余りにそのただ中に存在し、影響力が強かったゆえに、そのような姿勢を貫き通せなかったのではないかとさえ思われたが、これは私の偏った読み取りかも知れない。本書を読んだ方々にこの点をお伺いしたいと思う。

本書の倉橋惣三の保育論（第六章）の中の『幼稚園保育法真諦』以降の保育論の展開と

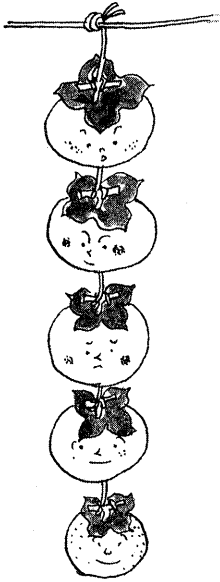
いう節で、著者は、『幼稚園保育法真諦』以降に執筆された文献に、この書との一貫性を欠く、あいまいとも思える記述が見られる事から、「惣三の保育論の全貌を理解するためには、『幼稚園保育法真諦』のみでなく、それ以降の論考もあわせて考察する必要があると考えている。」と述べ、そのくい違いについての解釈をまとめている。

保育の形該化を恐れながらも新しい形を作っていくことを求められるという立場にいる彼の矛盾。机上の理論を組み立てるのではなく、保育現場に最も近い場から考えるだけに、その現場を少しでも改善しようと思えば思うほど、もしかしたら端からみれば一貫性のないことを言ったり書いたりせざるを得ない事も生じるかもしれない。いくつかの著作を読んだだけでは、ややもすると現実離れをした楽天的な、理想主義的な人間と捉えられ

がちな倉橋が、その様な矛盾や疑問をいっばい抱えながら生きた人であることが、本書を讀むと伝わって来る。

倉橋惣三についての研究の集大成である本書では、案内役としての著者は背景に引いているが、著者の倉橋に対する熱い思いは、書全体を貫いている。

形や方法をだけが伝わっていくことへの問題を誰よりも警戒し、批判していた倉橋だか



ら、そのような倉橋の集大成としての本書から、倉橋の述べてきたことや行ってきた形をまねるだけでは何にもならない。それは著者の願うところではないだろう。倉橋の保育論ができていった必然性や意味を、時代や背景とからめてくみ取り、そこから現在の保育を見つめ直すことが、そしてそこからこの先の方向性を考えていくことが必要なのだ。それこそが、著者がこの書を著した意図にほかならないのだから。（お茶の水女子大学）